【別紙様式２】（中学校用）

フロンティアスクール用報告書

都道府県名	広島県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	広島市立井口台中学校					
学　年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	5	5	6	2	１８	２８
生徒数	１９６	１７３	２０７	9	５８５	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

「基礎学力」の確実な定着と「思考力･創造力」の育成

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

生徒の学力を全国標準学力検査（ＣＲＴ）の結果からみたとき，２年生の理科を除いて，全体的には全国平均と有意差はなく，おおむね良好であると考えることができる。しかし，問題別に分析してみたとき，論理的に考える力や物事を多面的にとらえる力，事象を関連づけて考える力などの「思考力」が不足していることがわかった。また，全ての教科において，「関心・意欲・態度」が全国平均を下回っている。

昨年度末に実施した授業アンケートの結果では，「もっと学んでみたい」と考えている生徒は，全学年とも少なく，授業の理解の程度は，学年があがるに従って低下しており，全体で１６%の生徒が，授業が「あまりわからない」「わからない」と答えている。

学習姿勢は，受動的で，すぐに答えを求める傾向が強く，自分の考えを積極的に発言することが少ない。また，発言しても自分の考えを論理的に表現することができない生徒が多いと教師は感じている。

これらのことから，生徒の学びが，記憶中心になっており，子どもの内面性（関心・意欲や知的好奇心，思考力，判断力，技能や表現力，それらと結びついた知識・理解）を捉えた学習活動が適切になされていないと判断した。

本研究では，二つの学習指導の工夫が必要であると考えた。一つは，確実に理解し，習得させておかないとその後の教科の学習に支障をきたす基礎学力的内容の確実な定着を図ることである。いま一つは，学習内容を身近な事象や生活あるいは課題と積極的に関わらせたり，体験や作業・調査活動などに取り組ませ，問題解決的・探究的な活動による学びの充実を図っていくことである。

そのために，全学年，全教科の学習指導において，研究に取り組むこととした。

(2)　年次ごとの計画

	○　テーマ 生徒一人一人の実態に応じたきめ細かな指導を通して，確かな学力の定着を図る。 ○　研究の見通し（仮説） 「必修授業」「選択授業」「総合的な学習の時間」において，「生きる力」を育てる指導の具体的な手だてを行えば，生徒に確かな学力が定着するであろう。

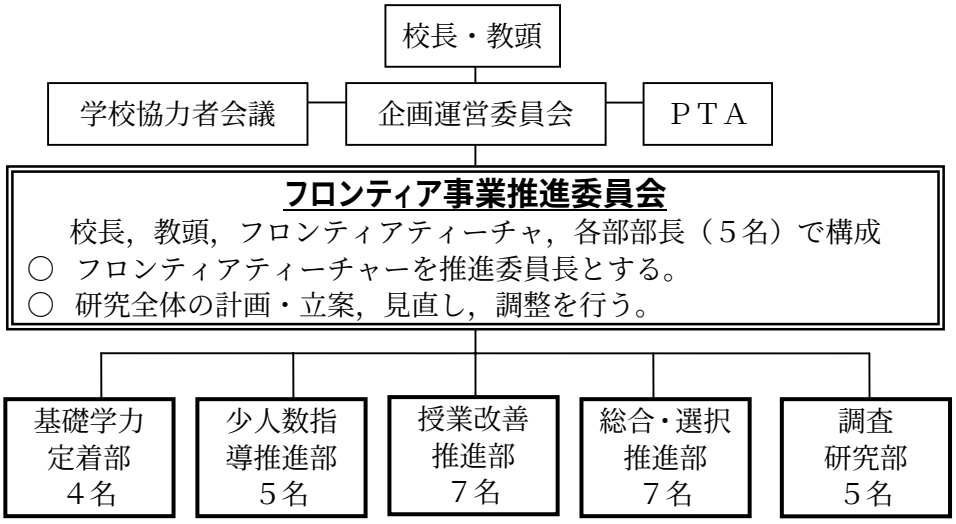
平成14年度	○　研究の見通し（仮説） 「必修授業」「選択授業」「総合的な学習の時間」において，「生きる力」を育てる指導の具体的な手だてを行えば，生徒に確かな学力が定着するであろう。 ○研究内容・方法 ①　評価規準・評価基準の作成 ②　授業改善 ア　指導改善の視点の明確化 イ　「生きる力」を育てる指導法の工夫 ウ　個に応じた指導の工夫 エ　評価の工夫 オ　少人数指導の工夫・改善 ・「基礎学力」「基礎・基本」「発展的な学習」を明確にした指導計画の作成 ・教材・教具の工夫 ③　選択授業の工夫・改善 現行の見直しとモデルプランの作成 ④　総合的な学習の時間の工夫・改善 現行の見直しとモデルプランの作成 ⑤　補充学習の検討 放課後や長期休業日を利用した繰り返し学習 ⑥　小学校との連携 ９年間を見通した，年間指導計画の共同作成 ⑦　教師の指導力の向上 ア　授業記録を活用した指導計画の修正と指導方法の改善 イ　公開授業研究の実施（全教科）

平成15年度	○　テーマ「基礎学力」の確実な定着と「思考力・創造力」の育成 ○　研究の見通し（仮説） 【仮説１】　目標や達成感をもたせる工夫を図り，組織的・継続的に「繰り返し学習」や「補充的な学習」を行えば，生徒に「基礎学力」が定着するであろう。 【仮説２】　すべての教科授業・選択授業・総合的な学習において，生徒が自ら考えるための手立てを明確にした「考える授業」を行えば，生徒の「思考力・創造力」を高めることができるであろう。 ○　研究内容・方法 ①　繰り返し学習による基礎学力の確実な定着 ア　授業のはじめのドリル学習（国語・数学・英語） ・目標をもたせ，達成感を味わわせる。 イ　補充学習「STEP UP MONDAY」（国語，数学，英語） ・個々の課題の克服を図り，達成感を味わわせる。 ②　「考える授業」への改善 ・各教科で育成できる「思考力・創造力」の明確化 ・具体的な手立てを明確にし，授業の実践を行い，その分析を行う。 ・　習熟度別少人数指導において，それぞれのコースの生徒の実態に適した，教材・学習過程の工夫を図る。 ③　選択授業の工夫 ・ガイダンスの充実「自己選択→自己決定→自己責任」 ・生徒の興味・関心，習熟の程度に応じたコースの開発 ④　総合的な学習による「思考力・創造力」の育成 ・教科学習内容と関連を図った総合的な学習の開発

	昨年度の中間報告書の計画に基づき，１学期に実践を行ったが，研究内容，方法が絞り切れていないため，研究を深めることが難しいと判断した。そのため，研究計画の見直しを行った。

平成16年度	○ テーマ 「基礎学力」の確実な定着と「思考力」の育成 ○ 研究の見通し（仮説） 【仮説１】 達成感をもたせる「繰り返し学習」や「補充的な学習」を行えば，生徒に「基礎学力」が定着するであろう。 【仮説２】 「学ぶ必然性をもたせる工夫」「思考を整理させる工夫」「多様な視点をもたせる工夫」「学習を既習事項や日常生活と関連づけさせる工夫」を図った「考える授業」を行えば，生徒の「思考力」が高まるであろう。 ○ 研究内容・方法 ① 組織的・継続的な繰り返し学習による基礎学力の確実な定着 ア ドリル学習（国語・数学・英語） ・目標をもたせ，達成感を味わわせるための工夫を図る。 イ 補充学習「STEP UP MONDAY」（国語，数学，英語） ・個々の課題の克服を図り，達成感を味わわせる。 ②「思考力」を育成する「考える授業」の創造 ア 下記の支援を取り入れた授業を実践し，その有効性の検証を行う。 ・好奇心や探求心を高めるための工夫 ・思考を整理させるための工夫 ・多様な視点をもたせるための工夫 ・既習事項や日常生活と関連づけさせるための工夫 イ 習熟度別少人数指導において，生徒の実態に適した，支援のあり方を明確にする。

(3) 研究推進体制



昨年度は，推進委員会で全てを企画・提案を行っていたので，職員間の共通認識を図ることが難しかった。今年度は，全教員が５つの部に所属し企画，提案を行うことにした。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

(1)「基礎学力」の定着

①　授業内ドリル学習の実施

目標や達成感を持たせながら，繰り返し学習を行わせることで，基礎学力の向上を図る。

【目標・達成感をもたせる工夫】

ア 学習順序，内容の工夫を図る。

イ 自己評価を行わせることで自己の学習状況を把握させる。

ウ 発展的問題を付け加える。

【出題内容】

国語　部首の意味を理解し，漢字の構造に関心を持つ
　　文の成分（主語・述語・修飾語）の基礎的な知識を身につける。
　　文と文をつなぐ言葉について，基礎的な知識を身につける。

数学　既習範囲（小学校の学習内容を含む）での基礎的な計算問題

英語　重要単語とイディオム，文法の復習

【成果】

国語　３つのパターンのドリルは，変化があり学習意欲につながった。

数学　同じ内容の問題を１サイクルごとに繰り返し出題し，途中式を見直させることが意欲向上につながり，結果として計算力が向上した。
　　自己評価表から，自分の弱点を読み取り，分析できる生徒が増えた。

英語　「３年間の必修単語６６０語」を品詞別に作成・配布することで，目的意識をもって取り組ませることができた。

②　ＳＴＥＰ　ＵＰ　ＭＯＮＤＡＹ（補充の時間）の取り組み

自分の学力に合った問題に取り組ませることで，課題の克服を図り，達成感を味わわせる。

【方法と達成感をもたせる工夫】

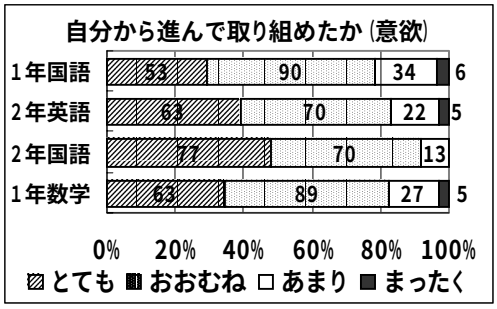
対　　象	１・２年生（３年生は授業）
実施時間	月曜日６校時　　１４：３５～１５：２５
実施教科	１学期　１年－国語　　２年－英語　　１０時間 ２学期　１年－数学　　２年－国語　　１０時間 ３学期　１年－英語　　２年－数学　　９時間
工　夫	３年の授業に出ていないすべての教員がＴ・Ｔで指導する。
	３種類の難易度別問題を準備する。
	毎時間，学習の成果と課題について文章評価させる。

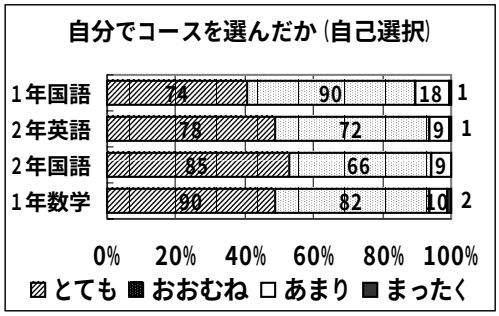
【成果】

国語　復習テスト後コース選択をさせることで意欲的に取り組んだ。

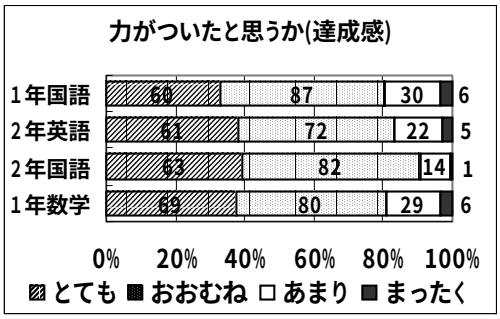
数学　自己評価で，どのような間違いをしたのかを書かせることで，弱点がわかり，次の学習に生かせた生徒が増えた。

英語　はじめの単語・表現テストにより，目的をもった学習が行われた。





補充学習終了後にアンケート調査を実施した。多くの生徒が意欲・自己選択・達成感のそれぞれで，肯定的な判断をしているのがわかる。国語では，１学期よりも２学期に向上している。これは，実践しながら，指導者の意見や他教科の方法を取り入れ，随時工夫を加えていったことの成果であると考えられる。

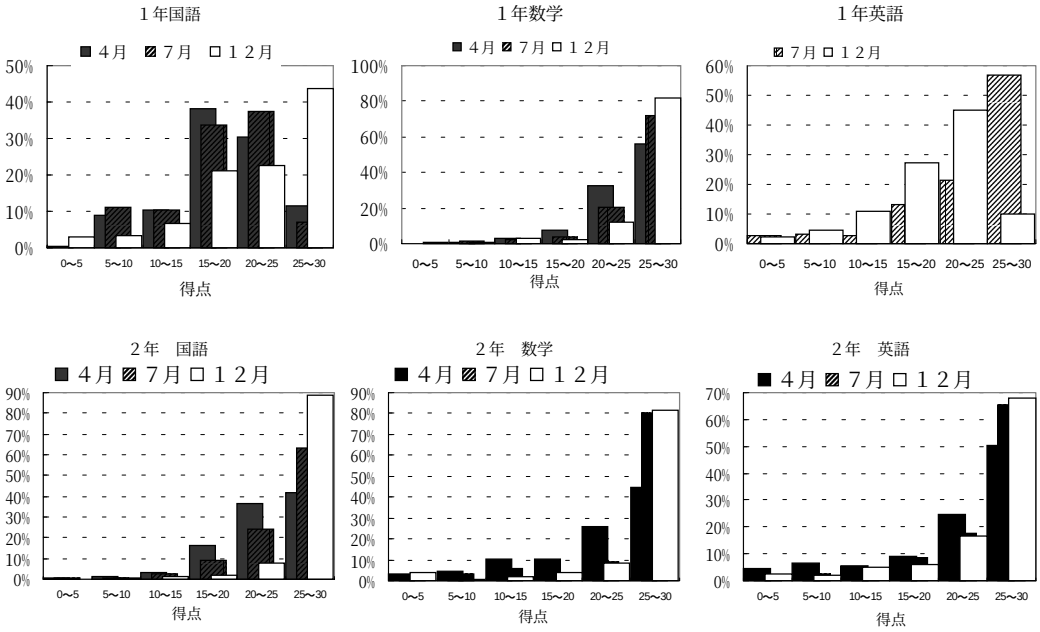


③基礎学力定着調査の結果

４月・７月・12 月に実施した基礎学力定着テスト（30 点満点）の，得点の人数分布の割合（人数÷受験者数）の変容を示す。

１年英語は７・12 月の結果である。教科の特徴として１学期と２学期の学習内容の差が大きく，テスト問題に難易差を生じざるをえず，直接の比較は難しい。そんな中で，25～30 点層は大きく減少したが，15～25 点層は増加しいている。

他の学年，教科においては，0～15点層の減少や25～30点層の増加など，中位層を中心に上昇傾向にある。授業内ドリルや補充時間設定等の繰り返し学習の効果を見て取ることができる。



(2) 「思考力･創造力」の育成

思考力は，問題解決に主体的に取り組む過程で育つと考える。したがって，主体的な問題解決への取り組みがなされるような授業を設計・実施することが大切である。そのために必要な教師の支援を以下のように設定して，全教科で授業改善に取り組んだ。その中で効果があった実践の概要を報告する。

① 好奇心や探求心を高める，教材や場面設定の工夫を図る。
② 思考を整理させる工夫を図る。
③ 他者との交流を図る。
④ 学習を既習事項や日常生活と関連づけさせる。

事例1）2年国語　教材「心のバリアフリー」 学習形態：一斉指導

１　育成したい論理的思考力

作品の構成や展開を正確にとらえ，筆者の考えと論理展開に対する感想(意見)を，知識や考えと関連づけて書くことができる。

２　取り組みの概要

(1)　１次感想の交流による学習目的の設定（支援①，③，④）

(2) 論理を把握させるための図式化指導の工夫（支援②）

ア　読み分けシートと内容理解ワークシート

イ　キーワードカードの作成・配置

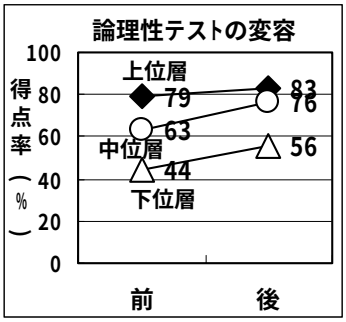
(3) 自作の図を説明する場，相互評価の場の設定（支援③）

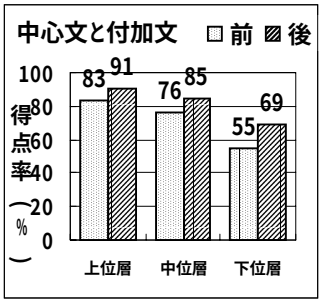
(4) 観点に基づく構成メモの作成（支援②）

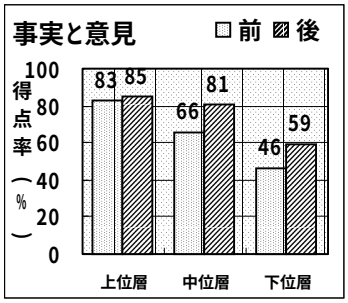
３　分析・考察

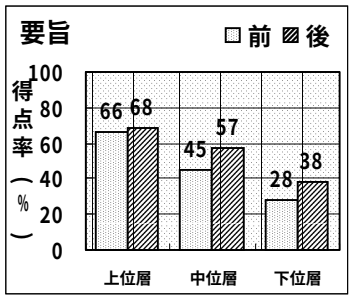
(1)　論理テストの変容

１学期(７月)と２学期(12月)に「中心文と付加文の読み分け」「事実と意見の読み分け」「要旨を捉える」論理テストを実施し、その変容を調べた。内容別、総合ともすべての層(ＣＲＴ検査により分類)で上昇していた。中・下位層の伸びは、読み分け練習やキーワード特定や要約図化の学習の成果と言える。しかし，上昇しているが「要旨」についての設問の得点率は高くない。論理の把握が「書く」力につながるまでにはなっていない。









(2)個の変容

抽出生徒	定着の不十分な生徒Ａ CRT検査の得点率　４０％	ほぼ定着している生徒B CRT検査得点率　７６％
分析と考察	当初キーワードの関係づけが不十分だったが、発表や相互評価を経て、段落相互の関係を意識するようになった。事例と意見を区別し、筆者の思いを理解しようとする姿勢が見える。	図化はある程度できるが，説明を苦手とする。語句や段落の関係づけを説明する表現力の育成が必要である。経験と関連づけて書けるようになった。
論理テスト	事前５０％→５７．５％	事前６０％→７７．５％

４　わかったこと

(1) 成果

・「読み分け」「図化」「要約図の評価交流」という学習の流れは、筆者の論理展開と主張を理解するために「考えること」を必要とする学習につながった。

・視覚的にとらえる読み分けワークシートや図化は、説明文における語句や段落の関係を強く意識させ、論理展開とその内容について考えさせることに効果があった。

・要約図の説明と意見交換（交流）は、個々の評価の具体性を促した。

・観点を明確にした構想メモに基づく作文は、経験を事例として取り込んで考えることにつながった。

(2) 課題

・筆者の意見についての生徒間の交流の場を多く持つべきだった。

・作業が目的化しそうな生徒に、本来の学習の目的との関わりを意識させ続ける工夫が必要である。

事例2）　3年社会　単元「わたしたちの生活と経済」　指導形態：一斉指導

1　育成したい社会的思考力・判断力

自分たちの住む地域の特性と求められている事業について，多面的・多角的に考察し，自分たちの町で利潤を上げることができる事業内容を，市場性，成長性，新規性，競合性の観点から，根拠を挙げて述べることができる。

2　取り組みの概要

「問題の認知→明確化→追究→表現」という問題解決的な学習を通して，実際に会社を設立する過程を体験させる中で，思考・判断する力を育成した。

(1)　学習意欲を高める教材・場面設定の工夫

「私達の町に会社をつくろう」という問題場面を設定し，企業の事業計画書を教材として用いた。事前に，計画書で重視される市場性（顧客対象），成長性，新規性，競合性の４観点について成功例を示すことで，課題追究意識を高め，追究の過程を把握させた。

(2)　生徒の思考を整理させるための工夫

「地域の特性と求められている事業」について意見交流を図り，ブレーン・ストーミングとＫＪ法を用いて，問題を整理させ，問題の所在を明確にした。

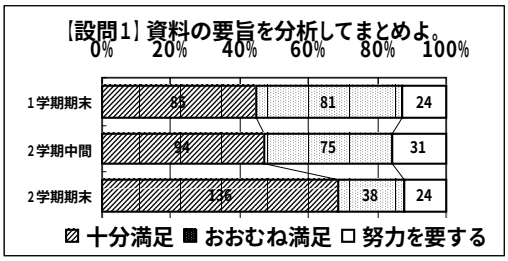
(3)　他者との交流を図る

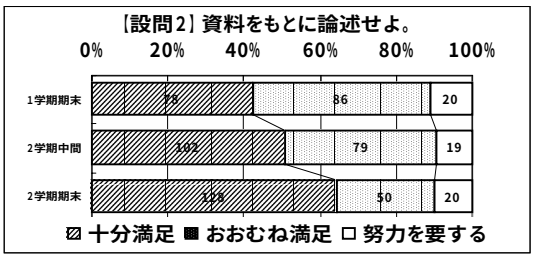
「問題追究」の場面において，班内・学級の意見交流による推理，検証の場を設けた。多様な見方や考え方を知り，個々の生徒が持っている既成の視点が揺さぶられることで，多面的・多角的な考察の方法を身に付けることができた。

3　分析・考察

(1) 定期テストによる調査

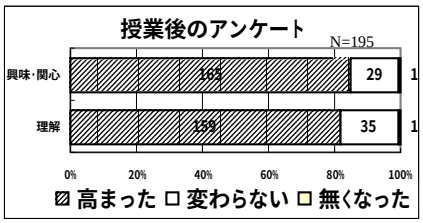
「資料の分析」と「小論文」について継続した調査を行った。いずれも徐々に向上しており，成果が見られる。生徒の思考力・判断力は応用力のあるものとなっていると考えられる。





【設問１】資料の分析　評価基準	【設問２】小論文　評価基準
論議の対象となっている現代の社会的事象について，各新聞の論調の要旨をまとめ，各新聞の論調の違いを把握することができる。	どの論調が，公共の福祉にとってプラスになるのかを公正に，根拠を挙げて判断し，自らの主張を述べることができる。

(2)　授業後のアンケート調査



80％以上の生徒が，理解，興味関心ともに高まったと回答している。「とても楽しい授業で，将来会社をつくりたくなった。」「自分の考えが社会で通用するのかを知りたい。」などの感想が見られた。

4　わかったこと

・追究前に約５８％の生徒が根拠を挙げて事業内容を述べていることから，本単元における問題の設定場面が有効であったと考える。

・ブレーン・ストーミングとＫＪ法による問題の整理や，他者との交流により，事業計画書の内容が深まった。これらの手だてが有効であったと考えられる。

事例3）　2年理科　小単元「空気中の水の変化」　指導形態：少人数指導

１　育成したい科学的な思考

・気象現象を既習事項や生活経験と関連づけて考えることができる。

・露点を調べる方法とその意味を説明できる。

・雲が生じる仕組みを，気温，気圧，湿度と関連づけて考えることができる。

・同じ気温でも湿度の高い空気の露点が高く，水滴ができやすいことを推測できる。

２　取り組みの概要

(1)　質問紙法，概念地図法で気象現象に関する生徒の既有の知識や考えを把握し，生徒の持っている誤認識を活用した指導計画を作成した。(支援①)

(2)　「富士山の傘雲」ができる仕組みを描画法で描かせ，討論させることで，認知的葛藤を生起させ，生徒自身に学習の課題を設定させた。（支援①，②）

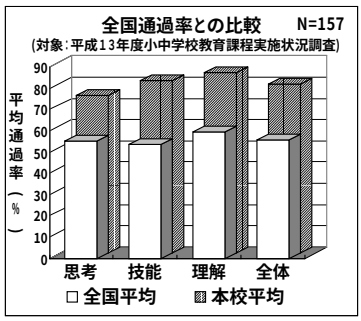
(3)　少人数グループでの課題解決後，情報交換を行わせることで，気温と飽和水蒸気の関係を見いださせ，水滴ができる原因を思考追求させた。（支援③）

(4) ワークシートとホワイトボードを活用し，学習内容を常に，既習事項や生活経験と結びつけながら学習をすすめた。（支援④）

３　分析・考察

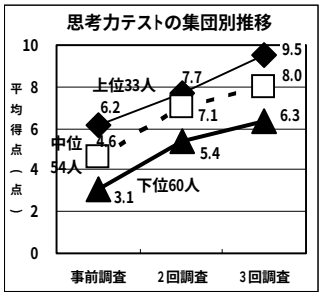
(1) 単元末調査の結果

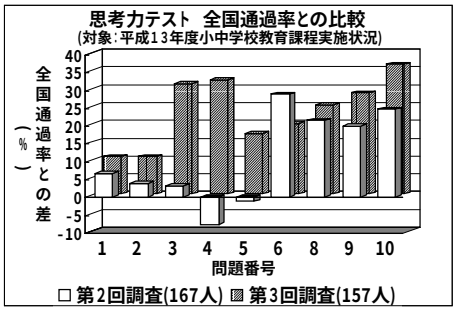
単元終了後，調査テストとアンケート調査を実施した。調査テストは，平成13年度小中学校教育課程実施状況調査の問題から抜粋し，科学的思考５問，技能・表現５問，理解４問で作成した。３観点とも全国通過率を大きく上まわっており，集団別（ＣＲＴ検査での科学的思考３段階評価により分類）の平均点が，上位群(12.6点)・中位群(11.4点)・下位群(9.9点)で差が少ないという結果になった。アンケート調査の結果，98%の生徒が意欲的に取り組めたと評価しており，授業中楽しいと感じることがあると答えた生徒が96%いた。これらのことから，ほとんどの生徒が主体的に問題解決的な学習に取り組み学習内容を概ね理解することができたと考えられる。



(2) 科学的思考力テストの変容

「思考力テスト（問題数11問）」を４月，７月，１月と継続して実施し，その変容を調べた。第２回，第３回の問題は，平成13年度小中学校教育課程実施状況調査から抜粋し（問１～６，問８～10)，全国との比較ができるようにした。全体的に向上しており，特に本単元終了後に実施した第３回調査では，全ての問題で，全国通過率を大きく上回っており，１学期の課題であった「問題を把握する力」「関連づけて考察する力」も向上している。また，どの集団(CRT検査による)も着実に伸びており，手だてが有効であったことがわかる。





４　わかったこと

・　事前調査で生徒の実態を把握することで，生徒の認知的葛藤を誘起させる指導計画の作成，問題設定場面の工夫が可能になり，それにより生徒の学習意欲が高まる。

・　描画法，概念地図は，生徒の考えを整理・自覚させるために有効であり，それを活用することで課題把握が容易になり，討論を活発におこなわせることができる。

・　他者と交流を行うことで，多様な視点を取り入れた学習活動が展開され，学習を深めることができる。特に，多様な集団を構成することが有効である。

・　少人数での学習は効果が高い。（２・３年生の取り組みとの比較から）

事例4）　1年数学　単元「比例」　指導形態：習熟度別少人数指導

1　育成したい数学的思考力

・　身の回りにある事象の中から２つの数量の関係を，変化や対応の様子に着目して調べ，考察することができる。

・　身の回りの事象を，比例の見方や考え方を生かして考察し，活用することができ，その結果が適切であるかどうか振り返って考えることができる。

2　取り組みの概要

(1)　「比例」の導入

「窓を開け閉めする」という身近で日常的な問題を取りあげ考察させた。

【きらめきコース（基礎コース）】（支援①，②，③）

実際に操作活動をさせた上で，２つの数量に限定して，ワークシートを使い考察させた。討論により，変域の意味や，離散量と連続量の違いにまで考えを広げていった。

【かがやきコース（発展コース）】（支援①，②，③）

実際の操作ではなく，図で考えさせ，出てきた数量のうち６つの数量についてワークシートを使い考察させた。討論により２つの数量の関係を話し合いながら分類させることで，y の増加量や，y/x の値に考えを広げることができた。

(2)「比例の利用」

「５円玉の枚数を数える」という日常的な事象を取り上げ，事象に潜む比例の関係にある２つの数量を見いだし，その関係を利用して課題を解決させた。

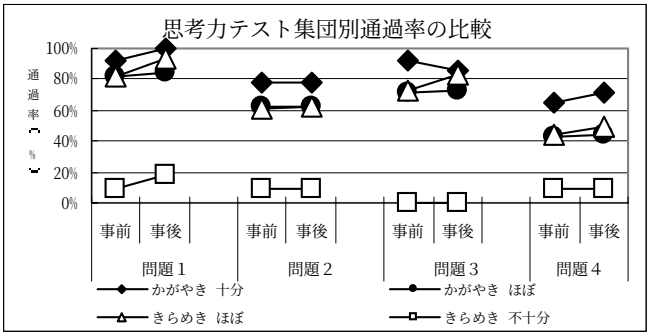
【きらめきコース（基礎コース）】（支援①，④）

使う道具を提示しどんな数量を使いどのようにして求めるのかを考えさせ，実際に枚数を求めさせた。事象に潜む比例の関係にある２つの数量を見いだし，その関係を利用させた。その後，本当に比例の関係にあるか振り返って考えさせる事で，これまで学習した表・グラフ・式の特徴を総合的にとらえ，考察させた。

【かがやきコース（発展コース）】（支援①，③，④）

５円玉の持つ数量を挙げさせ，それらを使って枚数を求めるにはどうすればいいかを考えさせたることで，比例の関係を利用させた。その後，「地図の面積を求める」の課題を使い，比例の関係を発展的に活用させた。「面積と周りの長さが比例する」という誤解答をグループで話し合わせることで，比例の関係でないことの反例を挙げことで間違いであることに気付かせた。

3　分析・考察



学習の前後に「思考力テスト」を実施し，その変容を調べた。問題は国立教育施策研究所の行った「平成１３年度小中学校教育課程実施状況調査」の中から，数学的思考力に関する問題を抽出した。全体的には，事前調査に比べて向上している。各問題を集団別（ＣＲＴ検査により分類）に比較すると，きらめきコースのほぼ定着している集団の伸びが大きい。これは，この集団が班での話し合いなどを活発に進めているためと思われる。

4　わかったこと

・身の回りにある事例を取り上げ，好奇心や探求心を生起させる学習は，問題を深く考えることにつながることが生徒の活動の様子や感想などからわかった。

・ワークシートを活用することで生徒の思考が整理され，筋道を立てて考えるようになってきた。

・交流の場を設けることにより，考えを広げることができるようになった。

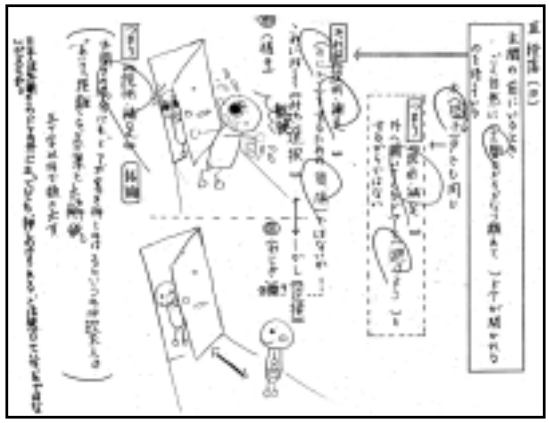
・振り返って考える事により，既習の事項を総合的にとらえ考察することができるようになった。

事例5）　1年国語　教材「玄関扉」　指導形態：習熟度別少人数指導

1　育成したい論理的思考力

筆者の論理展開の工夫と筆者の考えを理解させる。

2　取り組みの概要



【きらめきコース（基礎コース）】

(1) 内容理解ワークシートの作成

主体的に文章と向き合わせるために，ワークシートを使って，自分なりにキーワードの抜き出しを行わせた。（支援②）

(2)　説明プレゼンテーションによる交流

作成したワークシートを基に，グループ毎に，様々な表現方法（小道具を使ったジェスチャー，図化，箇条書きなど）で説明を行わせ，内容の確認，修正を行わせた。(支援③)

(3)　要約文の作成・交流(支援③)

ワークシートを振り返らせ，全文の要約に挑戦させた。１つの要約文を取り上げ，みなでより適切なものへと修正を行った後，自分の要約文の見直しを行わせた。

【かがやきコース（発展コース）】

(1) 要約図化シートの活用（支援②）

上段本文からキーワード，キーセンテンスを見いださせ，下段スペースに，要約図を書かせた。評価基準を明確にし，添削図化シートを返却することで，生徒は自分の学習状況を容易に確認することができ，目的意識をもった学習となった。

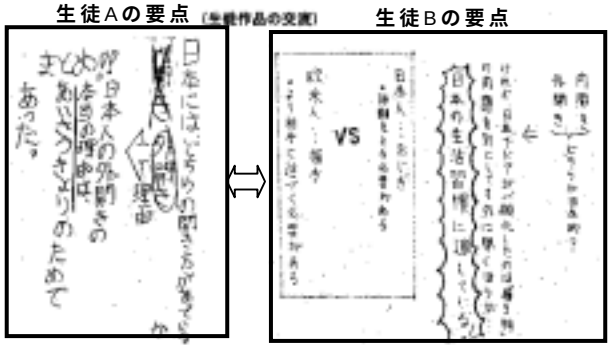
(2) 要約図化の交流（支援③）

他者の回答例と比較させることで，自分の弱点や矛盾に気づかせ，思考を整理・修正する手だてとした。

(3) 指導と評価の一体化

毎回生徒が書いた要約図化を分析し，正答率の低いポイント(事前に設定した評価基準）を重点指導目標として設定し，授業を構成した。

生徒Aの要点（生徒作品の交流）　　生徒Bの要点

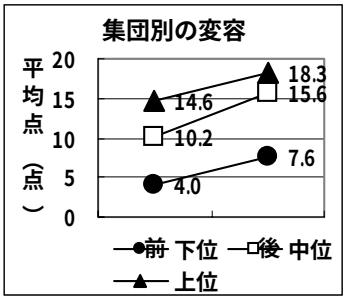


（例）	予習プリントの分析	一斉授業の重点指導
ポイント５	ポイント 5 が生徒の図化から多く抜けていたのは、予習段階において筆者のいう「ヨーロッパ的」の具体的な内容がつかみきれていなかったためと思われた。	「～的」「～性」「～式」「～風」などの接尾語の学習を取り入れることと「敵対的」の示す部分を問う発問をすることで先の両者が一致することに気づかせた。

3　分析・考察

【きらめきコース（基礎コース）】

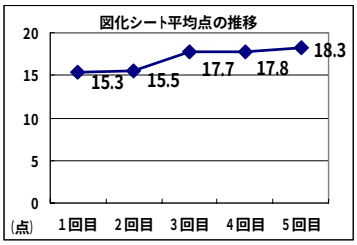
授業の前後で，単元についての論理性テスト(20点)を行った。全体的に向上しており，特に中位生徒の伸びが顕著であった。これは，基礎コースにおいて，中位集団が主体的に学習を進めたことが大きな要因であると考える。問題別では，キーワードを抜き出して記述する問題の正答率が特に高まっていた。問題提起に対する要約は，準正答を含み50%にとどまったが，確実に成果が見られる。



【かがやきコース（発展コース）】

図化シートの分析を行った。３つのポイントのうち，１・２回目では，２個しか見つけられない生徒が最も多かったが、３・４回目では３個の群が多くなり，最終回では７５名

中 61 名が完全解答できるようになった。平均点の推移から，徐々に，完成度が高まっているのがわかる。



4　わかったこと

・図化指導は，筆者の論理を視覚的に捉えさせ，その妥当性を考えさせるために有効である。

・思考を整理・修正，深化させる手だてとして，交流を図ることが有効である。

・習熟度別指導の基礎コースでは，中位集団の向上が顕著に見られる。

事例6）　1年英語　マイレポートを活用した表現力の育成　指導形態：習熟度別少人数指導

1　育成したい表現力

・伝えたい内容や場面，目的，相手に応じて，語句や表現，文の形式を選択できる。

・自分の考えや気持ちなどを正しく適切に書いたり話したりできる。

・場面に応じて相手の理解を確認しながら，適切に話すことができる。

2　取り組みの概要

(1) マイレポートの作成

<ステップ１>　イメージを膨らませる。（支援①，④）

「私は～が好き」というテーマで，書きたいこと，伝えたいことを図式化する。自由に選択させることで，学習意欲を高める。

<ステップ２>　使える単語を探す（支援②）

【きらめきコース（基礎コース）】表示された英単語の中から使いたいものを選択させる。単語の意味がわからない場合は，辞書で調べさせる。

【かがやきコース（発展コース）】自分で表現したい英文に必要な単語を辞書で調べさせ，表現の幅を広げさせる。

<ステップ３>ヒントを利用した英文をつくる。（支援②）

<ステップ４>自分の考えをまとまった英文で表現させる。

(2) マイレポートの交流（支援③）

<ステップ５>自分の考えを話す，友達の考えを聞く

【きらめきコース（基礎コース）】グループ内で順番に発表を行わせ，その内容を穴あき文にまとめ。基本的な文の構成を確実に身につけさせ，聞く力を育てる。

【かがやきコース（発展コース）】グループ内で順番に発表を行わせ，自分の英語で意見交流を行う。英語で通じ合える楽しさを体験させることで，表現する意欲を高める。

<ステップ６>活動を振り返り，自己評価をする。

3　分析・考察

プログラム７とプログラム８のマイレポートの得点を比較した。

【かがやきコース（発展コース）】

３点の生徒が減少し，４・５点の生徒が大きく増えた。これは，文が増え，まとまりのある構成を考えた生徒が増えてきたということである。交流の成果が表れていると考え

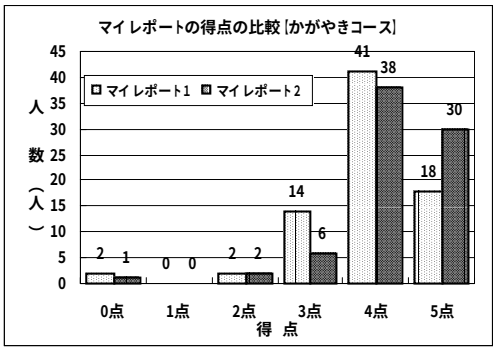
ている。

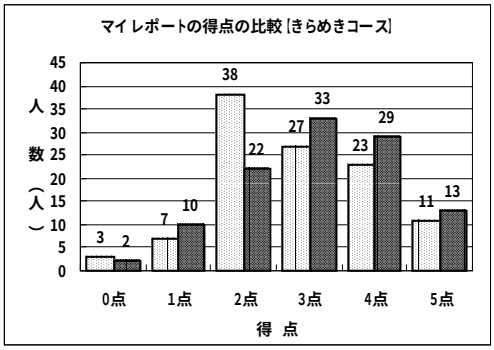
【きらめきコース（基礎コース）】

２点の生徒が減少し，３点～５点の生徒が増えている。これは，内容につながりのある文を書ける生徒が増えてきたことであり，スモールステップによる細かな指導の成果であると考えている。

４　わかったこと

・スモールステップでの，マイレポートの作成は，表現する方法を身につけさせるために，どの学習層にも有効である。
・グループでの交流は，特にかがやきコースで有効である。きらめきコースでは，工夫が必要である。
・継続した取り組みにより，効果が現れると考えられる。（ここでは，習熟度別指導を述べたが，一斉指導での２年，３年の取り組みにおいて，大きな効果がみられている。）





２．今後の課題

本年度の取り組みから，「思考力・創造力」の育成には，下記の支援が有効であることが見えてきた。

① 生徒の好奇心や探求心を高めるためには，自分の生活と関わりの深い教材や概念葛藤を誘起させる教材，場面設定の工夫が必要である。
② 思考を整理させるためには，図式化が有効である。
③ 他者との交流を図ることで，思考を深めることができる。

しかし，この支援に関する研究が不十分である。したがって，この支援を具体化した授業改善に取り組むことが課題であると考える。特に，習熟の程度に応じた支援のあり方が不十分であり，さらなる研究が必要であると考える。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

(1) 基礎学力定着調査の実施
　○実施教科　国語，数学，英語
　○毎学期実施し，全体の変容と焦点生徒の変容を調査
(2) 観点別到達度学力検査（ＣＲＴ）の実施と分析
　○全学年で実施（３年２月，１・２年３月）
(3) 広島県基礎学力定着状況調査の実施と分析
(4) 各教科実践報告会の実施
　○調査テスト，学期末テストを活用した調査と分析
　○全体の変容と焦点生徒の変容を調査
　○１学期実践報告会と２学期実践報告会の実施
(5) 生徒・保護者アンケート調査の実施
　○少人数指導についてのアンケート調査（毎学期）
　○「生きる力」に関するアンケート調査（年度末）
　○学校評価に関わるアンケート調査（年度末）
　○生徒による授業評価の実施（毎学期）

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

１．平成 15 年 11 月 14 日(金)　広島市地区協議会（中区・西区・佐伯区ブロック）
　　内容　公開授業，教科協議会，全体会，講演会
　　対象　各中学校教務主任，指導方法の工夫・改善担当者，中学校保護者
　　場所　広島市立井口台中学校
２．平成 15 年度中間報告書（冊子）を作成し，市内中学校へ配布予定
３．ＨＰで，平成15年度のまとめを公開する予定
　　（http://www.inokuchidai-j.edu.city.hiroshima.jp/）
４．学校訪問に来られた先生方に，本校の実践を説明している。
　　（フロンティアティチャー）

◇　次の項目ごとに，該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　■１４年度からの継続校

【学校規模】　□３学級以下　□４～６学級
□７～９学級　□１０～１２学級
□１３～１５学級　■１６学級以上

【指導体制】　■少人数指導　□Ｔ．Ｔによる指導
■その他

【研究教科】　■国語　■社会　■数学　■理科
■外国語　■音楽　■美術　■技術・家庭
■保健体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■有　□無